

貨物便受け入れ体制さらに充実

■北九州空港、開港20周年迎える

北九州空港は16日、開港20周年を迎える。アジア主要都市に近い立地かつ24時間運用可能な海上空港であり、貨物便受け入れ体制を充実させるための各種施策が展開されている。2027年8月末には滑走路（現行2500メートル）の延長（3000メートル化）が予定されており、長距離国際貨物便のさらなる就航への期待度も高い。半導体や自動車をはじめとする産業集積が進むなかで、北九州空港は「九州・西日本の物流拠点空港」としての役割を担っており、25年末には大規模な半導体製造装置の輸送も実施された。



九州・西日本の物流拠点としての役割を担い、さらなる飛躍を目指している（北九州市提供）

北九州空港の設置管理者は国土交通大臣。供用開始は06年3月。24時間利用可能な空港として、大型機を含めた貨物便就航実績が豊富だ。貨物機専用エプロンの整備も順次、進められてきた経緯があり、現在は貨物地区の前面に大型貨物機対応を含む3スポット（国内線1スポット、国際線2スポット）が並ぶ体制となっている。さらにこの3スポットの北側に新たなエプロンを整備する計画が、国土交通省の25年度予算に盛り込まれた。25年度の事業は「設計」となっており、この設計を踏まえて供用開始時期など詳細が決まる予定だ。

北九州空港の強みとして、九州・東九州・中国自動車道の結節点に位置していることや、空港機能の高い拡張性が挙げられる。ターミナルビルの運営を担う北九州エアターミナルがメインデッキローダー、ハイリフト

ローダー、ドーリーなどのGSE機材を所有。就航する航空会社にとっては初期投資が軽減されるといったメリットがある。現在、大韓航空やユナイテッドパーセルサービスの国際貨物便、ヤマトグループおよび日本航空グループによる国内貨物便が運航されている。定期貨物便に加えて、大型貨物機を含むチャーター便の受け入れ実績も豊富だ。

貨物施設の構成としては、開港当初の貨物ビルに加えて第1・第2国際貨物上屋、貨物テント倉庫、国内第2貨物上屋、国内貨物テント上屋がある。25年10月にはエアワールド社による航空貨物上屋（フォワード）施設が開業し、12月に本格的に運用が開始された。

国際航空貨物の保安制度の厳格化（爆発物検査の強化）に対応するため、第1国際貨物上屋にX線検査装

置が導入され、16日に運用を開始する。X線検査装置の仕様（間口）は高さ180センチ/幅183センチ。3トンまでの大型貨物や航空貨物専用コンテナの検査が可能だ。関係者が連携し、九州・中四国で唯一、貨物定期便が就航している北九州空港の貨物拠点化を促進する。

北九州空港物流拠点化推進協議会（事務局・北九州市）は「スカイコネクTKJ」のコンセプトのもとで、「九州・西中国の物流拠点空港」としての機能強化を目指している。自治体・荷主企業・物流事業者・団体など、地域が一丸となって「地域の貨物を地域の便で運ぶ」という流れをつくり、貨物便ネットワークを拡充。北九州空港の利便性がさらに高まるという好循環を生み出すための施策に取り組んでおり、利用促進のための各種支援制度も設けている。